



令和元年度 さいたま市立土呂中学校 学校だより

見沼のほとり

第 7 号

令和元年11月1日

学校教育目標

主体的に生きる人間の育成 <意欲・健康・豊かな心>

伝統の「自分たちで創っていく学校」

校長 富田 敦

11月18日は土呂中学校25回目の開校記念日です。

「先日の台風の時、校庭は冠水しませんでしたか？」と梅棹教諭が心配して私に話しかけてきました。本校で初任者指導を担当している梅棹学教諭は、開校から5年間土呂中学校で国語、女子テニス部を担当していました。開校当時、大雨が降ると、校庭はすぐに冠水してしまい、水が引くまで1週間かかったこともあったそうです。今回の冠水は1m以上あったものの、翌日には水が引いたことを話すと、安心した表情で開校当時のことを話してくれました。着任した第一印象は「きれいな学校だ」…。最初はまだ制服が決まっていなかったため、2・3年生は前学校の制服で、1年生は私服で学校生活を送っていたそうです。校章は、生徒がデザインしたものの中から選ぶこととし、梅棹教諭のクラスだった生徒の作品が選ばれたそうです。校歌も自分たちで作詞してみようという取組もあったとのこと。生徒や先生は「自分たちで自分たちの学校を創っていく」気概に満ち、実際に自分たちで学校を創っていくことが本当に楽しかったと振り返っています。また、大砂土中、植竹中、泰平中から集った生徒で、1年生から3年生までがお互いに顔も名前も知らない間柄であったにも関わらず、集団としての違和感を感じられなかったと言います。それは、いい意味で生徒の間で緊張感があったからであろうと話してくれました。土呂中学校の出発は「よかったという思い出しかない」と笑顔で話を締めくくってくれました。

開校から四半世紀が経ち、第25期生徒会本部が動き始めました。吉田啓明生徒会長は「自分で意識をもって行動できる土呂中生にしていきたい」と抱負を語っています。「やらされてやるのではなく、自分たちの意思をしっかりとをもって行動することを目指す、課せられた課題にはプラスアルファを出すまで取り組んでいきたい」という決意をもっています。「あいさつは、やらされてするのではなく自分があいさつをしたいからする。行事での校歌は土呂中に誇りをもっているから歌いたくなる。そのような学校にしたい」と熱い思いを語っています。開校当時の「自分たちで学校を創っていく」という思いに通じるものがあると感じました。

市駅伝競走大会は昨年を大きく上回る好成績でした。支えてくれた家族や仲間、先生方に感謝の気持ちを忘れない、さらに厳しい練習に明るく前向きに取り組むチームワークのよい駅伝競走部でした。

細田安理沙女子キャプテン「3年生で駅伝をやるかどうか迷いました。私は2年生の時に膝のけがをして駅伝にもバスケット部の活動にも参加できず、残念な思いをしました。今は、駅伝をやってよかったと思っています。第13位、あと7秒で入賞、という結果には、よかったけれど悔しいという思いです。私は走れなくて残念でしたが、みんなががんばってくれてよかったです。雰囲気の良い、明るいチームでした」

本間希望男子キャプテン「昨年1区を走らせてもらったのにいい走りができませんでした。今回また1区を任せられ、とても緊張しましたが、スタートラインに立ったら『やるしかない』と思い、自分の走りことができました。ここまで支えてくれた人に感謝します。駅伝をやってよかったと思います」

男子アンカーの大西兼人選手(3年)は、ハチマキをして力走しました。そのハチマキは大会前日に、クラスの仲間が激励の言葉を書いて渡してくれたものです。仲間の思いに応える3年生らしい素晴らしい走りでした。

合唱コンクールにたくさんの保護者、地域の方々がお見えになりました。今年も体育館に感動の歌声が響きました。審査員 監物幸男見沼小学校長も「レベルが高い。聴く態度も素晴らしい」と講評でお話してくださいました。

先日、「11月から学校への電話連絡は8時10分から16時40分の間をお願いします」というお願いを教育長、校長の連名で配付いたしました。ご理解賜りますようお願い申し上げます。



男子6区 大西選手(3年)